

ヨハネによる福音書 7:25-31

アドヴェントクランツに火が灯され、主を待ち望む私たちの歩みが再び新たにされることとなりました。そこで、その私たちに約束されていることは主イエス様との出会いです。クリスマスシーズン、御言葉が、繰り返し、何度も、「インマヌエル、主、我らと共にいます」と語るのはそのためです。そして、このイエス様との出会いは、私たちにとってはまったく未経験のものではありません。これまで何度もイエス様と出会ってきたのが私たちであるからです。従って、このイエス様との出会いが、まるで年輪のように積み重なってできているのがイエス様を信じる私たちの生涯でもあるのでしょうか。しかし、それにしても、私たちはどうしてそこまでイエス様に出会う必要があるのでしょうか。それは、それで十分ということはないからです。言い換えるなら、絶えず新たにされなければならないのが、イエス様と出会い続ける私たちでもあるからです。

そして、この日迎えたアドヴェントの期節は、その機会を私たちに与えてくれるものでもあります。そこで先ず思い起こしたいことは、イエス様との出会いは誰からも強制されるものではなく、それゆえ、新たにされるものでもないということです。イエス様と私たちが出会うのは、出会わなければならないからではなく、それゆえ、強制的に新たにされなければならないからでもありません。しかし、せっかくイエス様に出会って、そこで何も変わらなければ出会った意味もありません。そして、この無意味だとの思いの厄介なところは、それが多分に私たちを追い詰めることがあるということです。ただ、もちろん、イエス様のお会いも、出会いによって新たにされることも、私たちを追い詰めるためにあるものではありません。イエス様との出会いによって新たにされるということは、イエス様と神様の愛ゆえに安らげることが約束されているということだからです。ならば、イエス様と出会い、安らかな気持ちになれないとしたら、それはどうしてなのでしょう。アドヴェント第1主日、その私たちに与えられている御言葉がこのヨハネによる福音書7章25節以下の御言葉でもあるのです。

そこで人々が問うていることは、イエス

様がメシア、救い主キリストであるか否かということです。そして、人々のその評価の背後にあるものは、御言葉が「これは、人々が殺そうと狙っている者ではないか。あんなに公然と話しているのに、何も言われない。議員たちは、この人がメシアだということ、本当に認めたのだろうか」と人々の声を記すように、その働きの大さゆえに、人々がイエス様を神の民イスラエルの敵、背教者とすら見していたということです。それだけではありません。最後のところでは、「しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、『メシアが来られても、この人より多くのしるしをなさるのだろうか』と言った」とあるように、信じる人々の中でも、未だメシアとしてのその評価が定まっていなかったということです。このことはつまり、救い主、メシアの到来が人々を安心させるどころか、返って疑念を生じさせ、その疑念がさらに混乱をも招くことになったということです。

そこで先ず冒頭に登場するエルサレムの人々に注目したいのですが、エルサレムは、ご存知のようにあらゆる意味でのイスラエルの中心でもありました。エルサレムの住人がイエス様に対する宗教的指導者らの動きを熟知していたのはそれゆえのことでもありました。「人々が殺そうと狙っている者ではないか」との発言がその点を物語っているわけですが、ただ、その彼らが指導者の動きについて語っているのは、この自らの判断に自信があったからです。彼らはこう語ります。「しかし、私たちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られる時は、どこから来られるのか、誰も知らないはずだ」と。それは、イエス様がナザレの出身であることは知っている、この、自分は知っていると思いが彼らをして救い主、メシアではないとの自信を深めさせることになったのです。そして、彼らのその言葉にもあるように、彼らにそのような確信を与えたのが聖書の御言葉でありました。それゆえ、御言葉が彼らの共通認識、常識の土台ともなったのです。

ですから、彼らの自信に満ちた発言は、聖書の御言葉が常識となっている、いわばイスラエルならではの特殊な事情がそうさせたとも言えるのでしょうか。それだけでは

ありません。宗教的にも社会的にもその中心にある、この「エルサレムという場所にいる」との特権意識が彼らをしてそのように発言させたとも考えられます。しかし、この時、イエス様の周辺にある人々のすべてが、このエルサレムの人々と同じ受け止め方をしていただけではありませんでした。「群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて」とあるように、群衆、つまりは、エルサレム以外の場所に居住し、奇蹟などを目の当たりにしてイエス様に従った人々ということでもあります。その群衆は、特権意識を持っている人々とはまた違った受け止め方をしていただけです。それが、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか」というこの発言に現されているわけですが、ただ、それがイエス様のなさること、仰ることに圧倒され、従った人々の心の内側でもあったのです。

ところで、こういう人の心の内に触れると、「信仰とは何なのだろうか」と虚しい気持ちになることはないでしょうか。そして、私たちがついそんなことを考えてしまうのは、そういうことがあり得ないことではなく、あり得ることだと、日頃からそんな風に信仰を捉えているところがあるからです。しかし、私たちがそう考えるのは、私たちの心が歪んでいるからではありません。群衆が「この人よりも多くのしるしを」と語るように、「多い少ない、大きい小さい」といった、そうした人としての判断は、信仰とはまた別次元の、人としての常識が私たちをしてそうさせるものだからです。そして、それは、エルサレムの人々も同じでした。従って、イエス様への群衆の評価が定まらないのは、イスラエルという特殊な状況がそうさせたわけではありません。そこに彼らの特殊な状況が関わっているのは間違いありませんが、けれども、特殊な人たちの特殊な事情がそうさせたわけではなく、彼らの人としての常識、イスラエルの人々が持っている共通感覚が彼らをしてイエス様がメシアであることを否定させた、あるいは、判断を躊躇させたということです。そして、興味深いことは、エルサレムの人々の常識と群衆の常識とが必ずしも一致しているわけではということです。それは、常識というものがその置かれている現実、状況によって左右されるものでもあるからです。

従って、そういう意味では、イスラエルは必ずしも一枚岩ではありませんでした。信じる信じないという点で異なる結果をも

たらしたのはそのためです。しかし、いずれにせよ、イエス様の発言や行動は広く認められていることでもありました。ですから、私たちの目からすれば、イエス様のメシアとしての評価は定まって然るべきであったと思うのです。ところが、その評価は定まるどころではなかった。それは彼らが一枚岩ではなかったからでもあります。そして、この一枚岩ではない、彼らの煮え切らない態度こそが、イエス様がメシア、救い主であるとの事実を返って歪ませることにもなったのです。そして、その最大の理由がそれぞれの持っている常識への拘りです。つまり、彼らの人としての常識がその目を歪ませた、あるいは、曇らせたということです。従って、メシア、救い主であることを人々に認めさせるには、人と一体化した、この「常識」という強固なものを打ち砕く以外に方法はありません。そうしなければ、先に進むことなどできないからです。ですから、御言葉が「神殿の境内で教えていたイエスは、大声で言われた」と語っていることは、彼らの「常識」を打ち破ろうとする、イエス様のその覚悟の現れであったとも言えるのでしょうか。ただ、大声を上げてまで示そうとされたその覚悟ほどとは、私たちが考えているものとは大きくかけ離れたものでもありました。それは、イエス様が「あなたたちは私のことを知っており、また、どこの出身かも知っている。」と仰るように、イエス様の意図するところは彼らの常識を頭ごなしに否定することではなく、むしろ受け止めるところにあったからです。

それゆえ、この受け止めるということは相当に力のいることです。ですから、感情に流されず、彼らの考えを受け止め、伝えるべきことをしっかり伝えていところに、イエス様の誠実さが現わされているようにも思うのです。しかし、私たちがその当事者としてこの場にいたらどうでしょう。イエス様のその発言に心から納得し、かつ、誠実だと思えたのでしょうか。「自分勝手に来たわけではない」と仰るように、イエス様は確かに勝手に来たわけではありません。「私をお遣わしになった方は」と仰るように、イエス様をお遣わしになったのは神様でもあるのです。それゆえ、イエス様が神様の真実を明らかにしようとしているのは間違いありません。ですから、常識に囚われ、神様の真実から目を背け、すべてを否定しようとしている人々に、また、常識に流され、自分の頭で物事を考えられずにいる人々に、神様の真実を伝えようして

いるのがイエス様のこの時の思いのすべてであったと思うのです。

ところが、神様の真実とイエス様の誠実さは人にはなかなか伝わりにくいものでもありました。それは、彼らにとっては未経験なものであり、想像すらできないことでもあったからです。だから、イエス様も

「あなたたちはその方を知らない。私は知っている」と、正直にそのままを仰ったわけです。けれども、未経験な者には、この言葉はとてもきつい言葉でもありました。ただ、もちろん、イエス様には人を突き放す意図はありません。「私はその方のもとから来た者であり、その方が私をお遣わしになったのである」と、イエス様が繰り返し同じことを仰っているように、イエス様は伝えるべきことをただ誠実に伝えただけだからです。しかし、未経験な彼らには、どんなに説明を尽くしても、それは分かってはもらえることではありませんでした。それゆえ、そうしたイエス様の態度に、人々が怒り、また、群衆が迷ったとしても不思議ではありません。この先、イエス様の身に何が起こり、それがどんな意味を持っているかは、彼らにはまったく分からないことであつたからです。ですから、御言葉が「イエスの時はまだ来ていなかったからである」と語るのはいずれのことでもありますが、ならば、この先のことも、この先に起こることの意味も、その両方を知っている私たちは、イエス様のことを本当にすべて分かっているのでしょうか。

ここでイエス様の仰ることは正しく、また、誠実に受け答えされているのも間違いありません。イエス様が仰るように、イエス様をこの世にお遣わしになったのは神様なのです。そして、それについては私たちもはっきりと分かっていることなのです。それゆえ、イエス様がここで仰っていることは、私たちにとっての「常識」でもあるのですが、ところが、このイエス様と同じ「常識」を身につけながら、どうして、私たちはイエス様の仰ることを、なさることが分からないと思ってしまうのでしょうか。また、イエス様が私たちに求め、願うことをどうして拒んだりするのでしょうか。十字架につく直前、イエス様が弟子たちに仰ったことは「互いに愛し合いなさい」ということでしたが、それは、その直前で「あなた方が私を選んだのではない。私があなた方を選んだ。・・・私があなた方を任命したのである」と語るように、イエス様との豊かな交わりに導き入れられたのがイエス様の弟子たちであり、私たちであるから

です。それゆえ、「互いに愛し合いなさい」というこの言葉は私たちの「常識」でもあるのです。ですから、この「互いに愛し合う」ということが、自分の気持ちを互いになすりつけ合うことでもなく、また、自分の気持ちだけが晴ればそれでいいというものでもなく、もちろん、どちらかの我慢の上に成り立つものでもない、このことは、私たちにもよく分かっていることなのです。ところが、そのような「常識」を身につけながら、そして、それが私たちの「共通感覚」であるのに、私たちは、どうしてイエス様の言われたそのままを行うことができないのでしょうか。その理由ははっきりしています。それは、せっかく身につけたイエス様の常識を生かし切れずにいるからです。だから、イエス様を拒む人々、心引かれながらも思い切りの付かない人々と同じように、自分の常識、この世の常識が優ってしまうのです。そして、そうした事態を招いてしまうのは、イエス様と共にあることを私たちが見失っているからです。

ただ、それについても私たちにはよく分かっていることなのです。そして、それは、イエス様も同じです。だから、覚悟を決めて、自分の常識、イエス様と神様の共通認識を人々に示されたわけですから、けれども、それは、自分の常識を押しつけるためではありません。もちろん、人々の非常識をなじるためでもありません。イエス様が覚悟を決め、すべてを承知の上で、ここでご自分の考えを明らかにしているのは説得を試みようとしたことではないからです。イエス様の願いはただ一つです。それは、ご自分と同じところに生きて欲しい、これだけなのです。だから、ご自身について「私はその方のもとから来た者」と仰ったのです。それは、「その方のもとから」というこの言葉の意味が「その方と共にいるところから」と置き換えることができるように、神様と共にいるところ、つまり、イエス様の仰ることを、なさること、イエス様のすべてを私たちが知るためには、神様とイエス様との関係性がそうであるように、神様とイエス様のいますところに実際に身を置く以外に方法はないからです。

ところで、Common sense、常識、共通感覚と言われているものを私たちが身につけることができるのはどうしてなのでしょう。それは、私たちが一つの共同体にしっかりと身を置いているからです。ですから、そう考えるなら、イエス様が大声で仰

ったことは、父と子と聖霊なる神様との交わりの中に私たちを導く、その招きの言葉でもあったとも言えるのです。まただから、その中で私たちはイエス様を見て、聞いて、そして、イエス様の本当の姿を知って、イエス様との共通認識を深め、その常識を身につけることになるのです。そして、そのために私たちに求められているものが「互いに愛し合う」ということでもあります。この愛ゆえに、私たちはイエス様の常識、その共通感覚を身につけることになるのです。ですから、私たちはイエス様とも兄弟姉妹とも、教会というこの交わりの中で実に様々なものを分かち合うのです。聖餐というイエス様の命すら分かち合うことが許されているのです。それは、それがイエス様の喜びでもあるからです。

ですから、私たちに求められていることはただ一つです。イエス様のいますところにしっかりと身を置いて、具体的にイエス様の喜ぶことを一緒にすることです。ただ、この一緒にするという事は、罪深く、欠け多い私たちにとっては煩わしいものなのかもしれません。自分の時間を奪われることでもあるからです。そして、そういうときに顔を覗かせるのが私たちのこの世の常識でもあります。このように、この世の常識とイエス様の常識と、このそれぞれをもっているのが私たち信仰者でもあるのですが、しかし、そうであるからこそ、イエス様は「その方といるところに」と私たちに招くのです。それゆえ、招かれ、そこで私たちは新たにされ、変えられていくことになるのです。ただし、この新たにされ、変えられることのイメージを私たちはいずれの常識から導き出すのでしょうか。昨日より今日、今日より明日が、右肩上がりには必ず良くなっていく、そうならなければならないと、まるで自己啓発セミナーで聞かされる話と同じものように考えているところはないのでしょうか。もしイエス様の常識がそういうものであり、それ以外は一切受け付けなかったら、そうした暮らしのどこに安らぎがあるのでしょうか。

この日の御言葉が私たちに伝えてくれていることは、イエス様がただ共にあること、共に同じところにいること、そして、その中で私たちが新たにされていくということ、変えられていくということです。ただ、御言葉に記されてる人々がそうであるように、この新たにされるということは、見た目には何も変わらないことであり、時に、一歩も二歩も後退しているかのよう

に見えるものでもあるのです。そこでイエス様の弟子たちのことを思い出していただきたいのですが、イエス様のことを見捨てたということは後退したということです。悪い方に変わってしまったということなのです。けれども、その弟子たちとイエス様はなお共にいてくださり、弟子としての歩みをまっとうさせてくださったのです。つまり、私たちに求められていることは、物事が自分の思うようにうまく運ぶか運ばないかということではなく、イエス様が一緒にいる、イエス様のいますところに自分もいる、神様が私たちに求められることはこのことなのです。それは、イエス様の常識に私たちが生きる時、そこにイエス様は必ず共にいてくださるからです。ですから、私たちの信仰において一番大事なことは、「イエス様が共にあるところにいる」ことです。

それゆえ、それは、自分だけを喜ばせて終わるものではありません。イエス様が喜んでくださることをすることです。そして、それはまた、こうして集められているすべての人と、一緒にわいわい言いながら楽しむことであり、喜び、祈り、感謝しつつ、イエス様と、主にある兄弟姉妹と、さらには世にあるすべての人々と、三歩進んで二歩下がりながらも、それでも一緒に歩み続けることなのです。イエス様と共にあるところで、互いに愛し合う姿がここかしこに見ることができるとはそのためです。そして、それが、私たちにためのクリスマスシーズンであり、まただから、クリスマスには、私たちの心を豊かにする、心温まる数々のエピソードがあるのです。そして、そこに、このご自分のいますところに、イエス様は今年も私たちに招くのです。それは、そうすることが、誰でもない、イエス様への私たちからの大きな大きなプレゼントとなるからです。ですから、そのためにも私たちは、希望のないところに希望を、喜びのないところに喜びを、光がないところに光を、主が共にあることを信じて、希望と喜びと光を、この神様とイエス様が最も喜ばれる贈り物を世の多くの人々に届け、また、分かち合い、イエス様と共にただ共にあることを、この、共にあるということ、心から喜び楽しみたいと思うのです。祈りましょう。